

# 三大工芸



代表者  
**金城秀男さん**

シューズミニッシュさんは、先代社長の頃から30年以上もの付き合い。「今の社長は仕事熱心で、その熱い気持ちにこたえようとうちも努力してきました」

## 難しいオーダーにも断らず 他社にできないことをやって形にする！

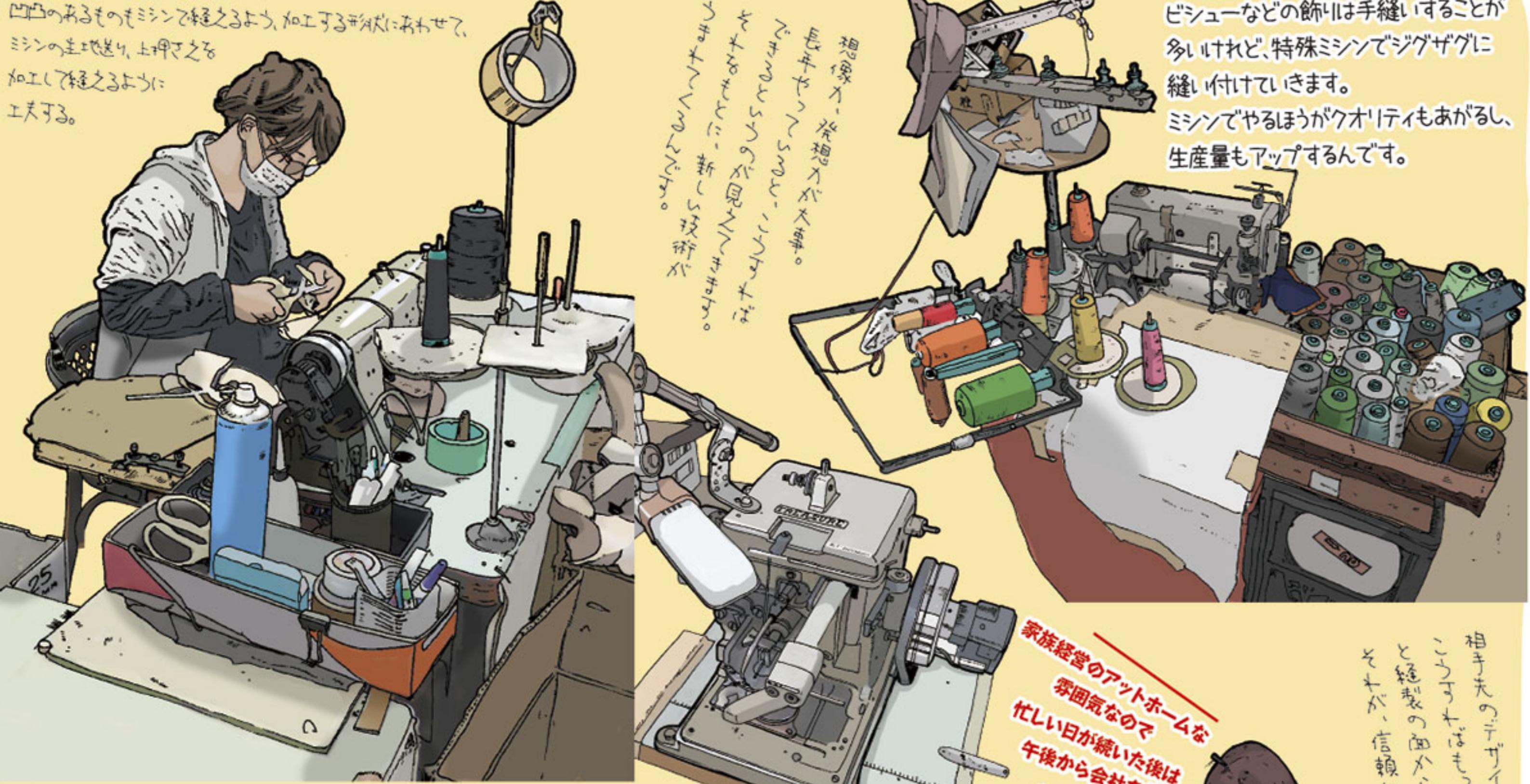
高校卒業後に、従弟がやっていた靴部品の加工会社に入り、17年間勤務。加工の仕事がほんまに面白くて、この仕事をずっとやっていこうと独立しました。最初は、家の一角で作業場を設けた、まさに家内工業。少しずつ会社を大きくし、何とか今までやってきました。

生野は昔、ヘップサンダルと呼ばれるつっかけの製造が盛んでした。それが海外製の安価なサンダルが出回るようになり、靴に関わる会社や職人が廃業していくんです。この時に痛感したのが、値段ではなく技術で勝負すること。生野の靴づくりは安さで勝負、と言われるような時代に、あえて、縫製や加工技術の質にこだわりました。業務用ミシンの種類の豊富さと、それを使いこなす職人が育っていることも、生き残れた理由ですわ。

今、うちの取引の半分を占めるのが、同じ生野区にあるシューズミニッシュさんです。シューズミニッシュは、履き心地や歩きやすさを考えぬいたデザイン、素材を使った靴づくりを行っています。うちのどこにも、扱ったことのない素材で作ってほしい、といった要望をされます。僕は技術で他に負けるのは嫌やし、他にできないものをやりたいと思っています。そやから、どんな要望にも応えたいと必死に食らいついでいくうちに、うちの会社の技術もどんどん伸びています。機械に頼るというより、機械の動きに合わせる手の感覚こそが職人技。日本の中で、ものづくりの技術が少なくなっている昨今、後世に引き継ぎたい技がうちの会社には息づいています。



凹凸のあるものもミシンで縫えるよう、加工する形状にあわせて、ミシンの生地通り、上手に之を加工して縫えるように工夫する。



今でも、シューズミニッシュのものは特徴的な形ばかりで、技術的にも難しい。

## 我が社の自慢

### 社長の子ども4人が事業を継承! 79歳のベテラン職人も活躍!



後継者不足に悩む中小企業が多い中、金城社長の4人のお子さんは自主的に家業を手伝いたいと働いている。長男・大進さんは後継者として活躍。長女・麻美さん、次女・明日香さん、三女・美規さんは、ミシンでの縫製を担当。さらに、79歳のベテラン職人も、現役バリバリ。



ビシューなどの飾りは手縫いすることが多いけれど、特殊ミシンで「ジグザグ」に縫い付けています。ミシンでやるほうが「クオリティ」もあがるし、生産量もアップするんです。

## 履物の甲の部分の生地を縫製 ミシンと呼吸を合わせた職人の手技が絶妙

ものづくり百景でもすでに紹介している有限会社シューズミニッシュ。「Re:getA（リゲッタ）」「Regetta Canoe（リゲッタカヌー）」をはじめ、生野区発のシューズやサンダルを製造・販売している。三大工芸は、30年以上に渡りシューズミニッシュの協力会社として、履物の甲の部分の生地を縫製する部分を受け持っている。現在、取引の約半分をシューズミニッシュが占めているという。

シューズミニッシュの独特のデザインは、歩きやすさや履きやすさを追求するために足の形に忠実にできている。そのため、曲線で構成していかなければならない。

カーブが多いので、ミシンの加工が難しい。それでも「自分たちの出来ることを最大限するだけ」と金城氏が言うように、サンプルを作っては修正や改善を行い、またサンプルをつくり…という繰り返しを経て、ようやく製品化へつながる。

シューズミニッシュを始め、同社に信頼して依頼する企業が多いのは、他ではできない生地の縫製ができる技術力。20数台の特殊ミシンをそろえ、縫い目や縫い方、糸の太さで使い分ける。特殊ミシンをこれだけそろえているところは少なく、それらのミシンを扱える職人がいることも同社のクオリティにつながる。

これまで依頼された仕事は、断ったことがない。できないとは言わず、できるようにするには何が必要か、どんな工夫をすればいいのかを考える。そこには、本物の職人魂が宿っている。

## 三大工芸

〒544-0011 大阪市生野区田島5-14-7  
TEL 06-6753-1703 FAX 06-6753-1717  
事業内容／サンダルやフラットシューズの生地の縫製を担う靴製造業